

更級への旅

65

芭蕉の「更級姨捨」来訪320年・その一

旧更級郡で、松尾芭蕉まつおばしやうゆかりのある所としてよく知られるのは長楽寺（千曲市八幡）ですが、坂城町網掛の十六夜観月堂（写真中央）も外せないゆかりの地であることを最近になって知りました。十六夜山の突先の高台です。

芭蕉が当地来訪後にまとめた「更科紀行」の中に盛り込んだ句「十六夜もまだ更科の郡かな」を、芭蕉の若いころの俳号「桃青」と一緒に刻んだ句碑（写真上）があります。近くにかやぶきの清楚な十六夜観月堂が建っています。伸ばせば手の届きそうな面前に千曲川、先には鏡台山があり、中秋の満月が昇ってきたときは…と想像するだけでわくわくしました。長楽寺より低地にあるせいもあり、抱かれています。ような感じを覚えます。



程を實際にたどった文章を書いていきます。その中に十六夜観月堂に寄ったくだりがあります。嵐山さんの感想です。「姨捨から坂城にかけては芭蕉ゆかりの枯淡の名勝が多く、また『奥の細道』ほど知られていないため、旧跡が荒らされず、趣が深い。この地に、三百年前より俳諧の嵐が吹き、それがいままなおひきつがれている。芭蕉の言霊が生きている。十六夜観月堂より千曲川を見下ろし、つくづく

『人々の芭蕉への思い』を感じた

「人々の芭蕉への思い」を感じた。ややほめすぎの感もありますが、嵐山さんはこの文章を、芭蕉がここに立ち寄ったという前提で書いています。本当かなと思つて坂城町史を開いたところ、はつきりしているわけではないというような説明があります。しかし現地に建てられた教育委員会制作の説明板には「芭蕉が立ち寄つ

坂城、浅間山、そして奥の細道へ

た」と書いてあります。参道沿いにある三日月型の切り込み入りの常夜灯（写真下）に、地元の人たちの思い入れを感じました。

芭蕉は十六夜観月堂のあるこの地に立ち寄ったのかもしれないし、立ち寄らなかつたかもしれない。今となつては、確かなことは分かりませんが、芭蕉が姨捨、長楽寺近辺で中秋の名月（十五夜）を味わつた翌晩、坂城で十六夜の月を觀賞したことは確かです。十六夜観月堂がある一帯は、武田信玄を合戦で破つたことで全国に名を

広めた戦国武将、村上義清を輩出した村上一族の発祥の地で、江戸時代より前にさかのぼれる神社の村上大國魂社がある地です。芭蕉が来訪したのは戦国の乱世が収束し、まだ百年がたたないころです。芭蕉にとつてもなまなましい史実だつたと思われず。とすれば、芭蕉がここに立ち寄つたとしても

おかしくはありません。芭蕉はこの後、さらに旅を



続け、浅間山を眺めます。そのときに作つた句が「吹き飛ばす石はあさまの野分かな」として更科紀行に収められています。芭蕉はさらに碓氷



峠を越え中山道なかみちどう経由で江戸に戻つていきました。そしてその翌年、芭蕉文学の集大成となる「奥の細道」へと旅立つていったのでした。嵐山さんは「芭蕉紀行」で、更科への旅は芭蕉にとつて「次の旅の『奥の細道』で勝負を賭けるといふ」その追いつめられた強い息が「更科紀行」に凝縮されている」と書いています。

「俳聖」とも称される松尾芭蕉が更級・姨捨に来訪したのが江戸時代の元禄元年（二六八八）。二〇〇八年は以来、三百二十年となります。芭蕉の残した「更科紀行」にまつわるエピソードに、もう一度注目したいと思います。

発行 二〇〇八年 一月十五日

編集 さくらしな堂

（代表・大谷善邦）

〒三八九・〇八一三

長野県千曲市若宮一八四・六

（旧更級郡更級村）